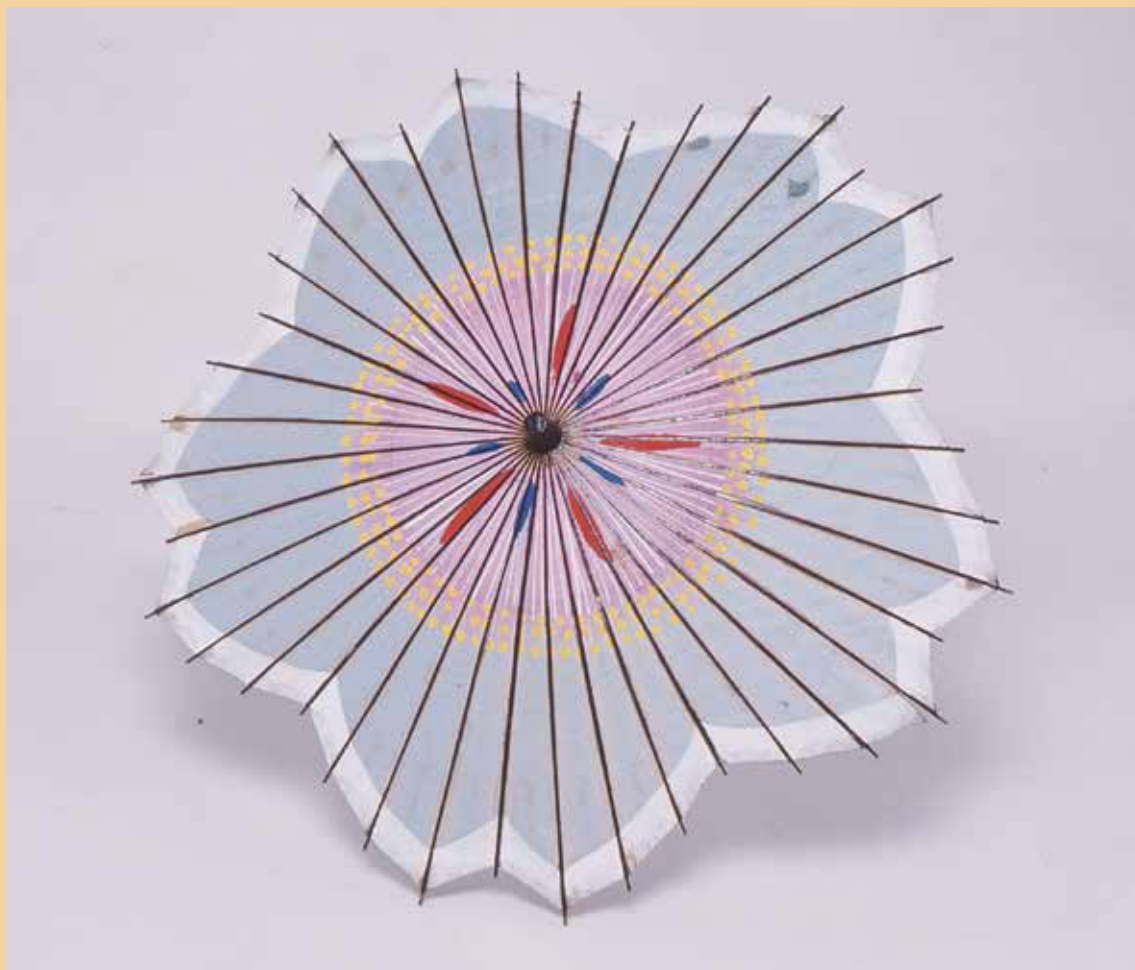




舞踊傘 桜型 昭和30～40年代

長さの異なる親骨を組み合わせ、桜花の形に作った舞踊傘。水色の平紙を張り、輪郭は白、中央はピンク、おしべなどを黄・赤・青などの色で手描きした、鮮やかな傘です。

内側のかがりは一色の紺糸のみを使用し、模様も二段の棒かがりとシンプルですが、その分銀色の中置紙と、桜花型の手元紙が映える作りとなっています。



企画展

岐阜和傘

2022.3.26(土)~5.22(日)

「かさ」という言葉を漢字で書くと、「笠」と「傘」が挙げられますが、頭にかぶるものが前者、柄をつけて差すものが後者として区別され、どちらも雨や雪、日差しから身を守るために使われます。

轆轤^{ろくろ}、柄竹、傘骨及び傘紙で構成する和傘は、13世紀以降の絵画資料に描かれていること、並びに13世紀後半及び14世紀前半と推定される地層の遺物に傘轆轤片があることから、鎌倉時代には作られていたと考えられています。

安土桃山時代に製作された絵画には、傘紙張り^{ろくろ}と糊づくりの作業風景とともに、材料となる傘骨、裁断した傘紙、閉じた状態や展開した状態の製品が描かれており、このころには基本的な製造技術が確立されていたといえるでしょう。

また、同じ傘づくりが描かれた絵画でも、江戸時代後期になると轆轤・傘骨・傘紙・繰込み・つなぎの状態の半製品や、張り作業、たたまれた状態の傘がそれぞれ描かれており、現在と変わらない工程で傘骨づくり、轆轤づくり、柄づくり、繰込み、つなぎ、張り、たたみ込みが行われていたことがわかります。

このころには傘は日常生活の必需品となっており、作り方や用途により、「番傘」「蛇の目傘」「日傘」^の「野点傘」「青傘」など、様々な種類の



傘張り図（「職人尽絵」
全18図の内）
江戸時代後期

傘が作られるようになりました。当時の浮世絵などからも、様々な和傘が使われていた様子がうかがえます。



三めくりの夕立
歌川国貞画 19世紀中頃

明治時代に入ると、日用品にとどまらず、和傘は海外への主要な輸出品の一つにもなりました。特に岐阜で生産される和傘は繊細優美であり、万国博覧会でも好評を博しました。

こうして拡大し続けた和傘産業は、戦後まもなく日用品の生産が復興するとともに最盛期を迎えました。しかし、昭和20年代後半、洋傘の普及により和傘の日用品としての需要は一気に減少します。日常生活において、和傘を差した光景を見ることは少なくなりましたが、今でも歌舞伎や祭礼などでは伝統的な和傘が使われています。

岐阜での和傘づくりに関する最も古い記録は、松平丹波守光重が寛永16年（1639）に播州明石から加納に移封された際、一緒に傘職人達を連れてきたという内容で、文化2年（1805）に書かれた資料に記載されています。

加納地区で傘づくりが盛んになったきっかけの一つとしては、宝暦6年（1756）、備中松山より加納藩へ入封した永井伊賀守尚陳が、困窮していた下級武士の生活を助けるため、内職として和傘づくりを奨励したことが挙げられます。当時の武士は体面を重んじたため、内職をしている姿を見せないよう、あまり表に出ることのない骨づくりなどを行い、傘張りや仕上げ

などは町民が担当しました。これが岐阜和傘製造の特徴である、つなぎや張りなどの工程を十数人の職人が分業で行う「分業制」につながったとも考えられます。分業制によるメリットは、大量生産に向いているということと、各工程を専門で行うためそれぞれの技術に精通できたことです。

これに加えて、加納地区が長良川中流域に所在するため、美濃和紙や竹などの良質な材料の生産地に近接して、水運を利用できたことや、加納藩の専売制があげられます。江戸時代後期には、和傘は美濃の名産品として江戸や大坂で名を馳せることとなります。

明治時代になると、傘職人や問屋などにより製品の統一と品質改良を目的とした組合が創設されました。その後、解散や設立を繰り返し、令和2年1月には、一般社団法人岐阜和傘協会が誕生し、岐阜和傘の保存や伝承を使命とし製品の普及及び産業振興を図っています。

江戸時代より、和傘はたたんだときに一本の竹のように美しく、かつ細く収まる傘が良品とされていました。特に、一般的に「細物」と呼ばれる蛇の目傘や日傘は、閉じたときの美しさが品質の決め手の一つになりますが、岐阜和傘はこの点にとっても優れています。前述の分業制による熟練の職人たちが、その製造を可能としていたのです。

また、岐阜では長年にわたり多様な装飾技法が受け継がれてきました。後継者の不足と原材料にかかるコストなどから現在製造されていないものもありますが、ここでは、岐阜和傘の美しさを支える職人の技の一部を紹介したいと思います。



蛇の目傘
五十間極細
昭和戦前

います。

【切継】

印刷による模様ではなく、平紙をあらかじめ図柄に合わせて切り抜いたり、異なる色柄の傘紙を切りつないだりすることで模様を作り出します。



蛇の目傘 四八 切継
昭和40～50年代

【網代】

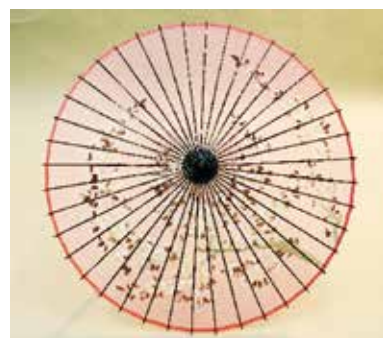
軒糸2本を骨の間ごとに交差してかけ、軒糸に沿って平紙の先を谷形に折り込む技法です。



日傘 月奴網代
昭和30～40年代

【描絵】

絹張りの傘に桜などの模様を手描きする技法です。



舞踊傘 絹描絵 桜
昭和40～50年代

光によって色や透け方が変化することも和傘の魅力の一つです。ぜひ博物館にお越しいただき、実際にご覧いただきたいと思います。

加藤栄三・東一記念美術館

加藤栄三・東一 生命の尊厳

2022.1.12(水)~2022.4.24(日)

岐阜市出身の日本画家：加藤栄三・東一両画伯は「生きる喜び」という共通のテーマで生命にまつわる多くの素描（スケッチ）・本画（完成作品）を描きました。

中でも二人が描いた生きものの作品からは、生命の尊さやすばらしさとあわせ、永遠のものでない限られた命が朽ちていく儚さをも描き出そうとする姿勢がうかがえます。

生きものを描いた栄三作品の根底にあるものは、対象への愛情です。生き物をいつくしむように描いた栄三の花鳥画からはその人柄と純粋な姿勢がうかがえます。絵というものは形や色を写すばかりでなく、自分の心を写すものだという内面描写で多くの名画を生み出してきました。

東一は横浜の三溪園で取材した池の中を泳ぐ一匹の鯉を描きました。後にその取材を基に描いた作品は、単に鯉を数匹描いたというだけの作品ではなく、精神の奥底を求めた黒色を基調とした精神性の

高い作品となり、改組第19回日展に「生（いのち）」という題名で出品されました。

東一は「生（いのち）」を描くにあたり次の



爽原
加藤栄三

ように語っています。

「池の中をじっと見てみると、そこには小魚だとか虫などがいっぱい居て、そういうものとの共存の中で生きている。鯉は沼の主みたいな存在だけれども、これだけでは生きられなくて、もろもろの生物との共存によって生きている。」

東一の黒を基調としたバックの画面は、限りある命の終わりを彷彿させる色調で、「生（いのち）」が発表される昭和62年（1987）より14、5年ほど前から黒色を画面のバックに施した静物画の中で何度も用いられてきました。黒を基調とした画面が初めて日展で発表されたのは昭和47年（1972）改組第4回日展からです。

発表作「蒼」は運命に導かれるように偶然にも兄：栄三の死と重なりました。

作家は、作品を発表する数年前から構想を練り始め、下絵を何枚も作り本画を描く準備をします。兄：栄三が亡くなったのが5月ということから考える



蒼
加藤東一

と、同じ年の11月に本画が発表できるとは考え難く、「蒼」という作品は、まるで栄三の死を予感したようなタイミングで発表されました。立ちすくむ人物（自画像）と横たわる馬（兄：栄三）を描いた「蒼」は、運命に導かれるように世に出た作品だと改めて思います。

本展では収蔵作品の中から、二人が求め続け大切に描いてきた「生命」をモチーフにした本画作品を、パステル・水彩などで描いた素描とあわせて展示いたします。

加藤栄三・東一記念美術館

わく 湧展からふう 風展への軌跡

—日本画・陶—

2022.3.15(火)~4.24(日)

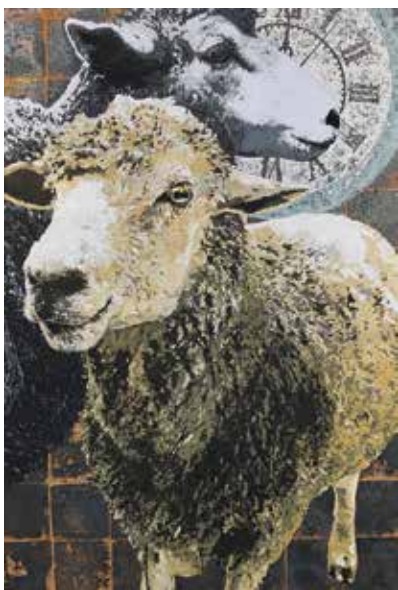
2013年、日本画表現の可能性を信じ、所属する団体展の枠を超えて集まった6名の日本画家がグループを立ち上げました。グループ名は「湧展（わくてん）」。

その後、グループ名を悠展、風展と改名し、本年、グループ創立10周年を迎えました。

多様化する美術の今を見つめ、伝統を踏まえながらも新しい日本画表現を探すように様々な基底材に岩絵具を使用し、描き始めました。

技法だけを取れば日本画は、天然に産出する鉱物を砕いた岩絵具、動植物から抽出した顔料、ガラスのフリットに色を閉じ込めた新岩絵具を、動物の骨、皮などから抽出した膠（にかわ）を接着剤として描きますが、洋画の膠彩画（グルーテンペラ）と区別するために、日本画は定義や技法の枠を外すべきだと考え、次世代の日本画を模索し始めます。

湧展のメンバーには新しい日本画を求めた結果、掛軸に魅せられた作家も現れ始めました。日本人特有の精密さと丁寧さからくる仕上がりの美しさに魅了され、古より続く掛軸芸術の



眠りの使者
宮原 剛

奥深さを知ることになります。掛軸にしかない多様性と伝統的技巧に溢れる布や軸先に一人の日本人画家として、この美しい文化を多くの人に繋げていきたいと挑み続けています。

さらに、「湧展（わくてん）」のメンバーには2018年より陶芸を含んだ立体作家が参加します。

平面、立体の区別をせず美術表現として素材とその素材を使用した意図を探り、ジャンル別の技法だけからの制作様式を打破し、

ジャンルを問わず制作意図から技法を選択することで困難な基底材にも対応してきました。あわせて絵画と立体を同じ展示空間に置くことでそれぞれの課題を見出し、次のステップへ駆け上がる研究スタイルでお互いを高めあってきました。

本展覧会では、創立当時の湧展から現在の風展に参加した日本画家、陶芸家13名の活躍を湧展グループ活動の軌跡とともに紹介します。



蝶華
神谷由美



パレードの馬
牧野真由子

企画展

ちょっと昔の道具たち

2022.3.6(日)まで

今年度で26回目を迎える展覧会。本展は小学校3年生の社会科単元「市の様子と人々の暮らしのうつりかわり」と関連させ、今と昔の生活の違いや変化、過去の生活における人々の生活の知恵を紹介します。

展示コーナーは、児童の生活に関連した「まちかど」「家のなか」があります。「まちかど」は50～60年くらい前、「家のなか」は80年くらい前の時代設定とし、ジオラマ方式の展示形式で楽しく学ぶことを目的にしており、当時の様子が理解しやすいように配慮しています。



「まちかど」(上)と「家のなか」(下)

本展では、展示内容や見学方法等について、岐阜市小学校社会科研究会の先生方と開催する博学連携委員会において協議するとともに、来館者アンケートも参考にしながら毎年見直しをおこなっています。本年度は「まちかど」コーナーにおいて、喫茶店と銭湯を開設しました。いずれも現代でも存在しますが、店の装いや使われている道具など、今との違いを考えることができます。



「まちかど」内の喫茶店(上)と銭湯(下)

また、「家のなか」コーナーには、戦前には岐阜市内で行っていた家も多かった、養蚕の様子を展示しました。繭づくりに欠かせなかったまぶしや保温用のこたつなどカイコの飼育に関する道具のほか、座繰り機など繭から糸を巻き取る道具なども紹介しています。



「家のなか」内の養蚕コーナー

＜学校団体の利用＞

本展は多くの学校団体にも校外学習として活用していただいています。

学校団体の見学プログラムはまず、「あかりのうつりかわり」についてのオリエンテーションを通して、子どもたちが昔の道具に興味をもつことから始めます。その後、展示室に移動し、道具やくらしのうつりかわりについて、「家のなか」の道具体験を中心に学びます。昨年度に引き続いて、当館の歴博ボランティアによる実体験と解説は休止となりましたが、「子どもたちが主体的に考える」活動を大切にしています。学芸員や職員が学びのナビゲーターとなり、解説や補助は子どもたちに求められない限り最小限におさえました。そのかわり、子どもたちの「わかったつもり」でいる事象について、再び問いかけ確かめるように働き掛けることや、資料の見所に子どもたちが疑問をもてるように紹介することを心掛け、体験の時間を多く確保しています。

ローラー絞り機付き洗濯機を前に、ある子は「ハンドルを回すところ（洗濯槽のパルセーター）がくるくる回って洗えるんだよね。（ハンドルを回す）あれ？違う。回ってないよ。おかしいな。あっ！ここが回った。そうか、名前にあるようにハンドルを回すところのローラーが回って、洗濯物がしぼれるんだ！」と、体験する前の認識が体験後に変わりました。



ローラー絞り機付き洗濯機の見学のように

また、「洗濯板の溝は、汚れを落とすため」という認識がある子には、表と裏のみぞの向きについて問いかけています。「どうしてみぞの向きが違うの？」と疑問をもった子どもが、体験するとみぞの向きで水がたまることと流れ落ちることが分かり、洗濯の「洗い」と「すすぎ」を表裏で使い分けている昔の道具の工夫に気付きました。

このように、体験をすることは新たな気付きや学びの定着に効果があり、子どもたち自身で道具に触れることは、「どうして？と思ったからやってみたら、こんなことが分かった！」という子どもたちの声を生み出しました。体験後の子どもたちからは、「なんで？がいっぱい見つかって楽しかった！そして、ぎもんのこたえがいっぱい見つかった！」「いろいろなぎもんを、みんなで体験しながらとけていくことが楽しかった」の感想が多く寄せられています。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大で当館への来館が難しくなった学校には、出前授業やオンライン授業、昔の道具の動画配信、タブレットを活用した見学も実施しています。出前授業やオンライン授業後には、家族を伴い、家族に学んだことを生き生きと説明する子供たちが多く見られます。

館蔵資料紹介

左) 竹生島図

紙本墨書淡彩 大正～昭和初期

総 44.3 cm×197.5 cm、本紙 32.2 cm×127 cm

令和2年度に新たに収蔵品に加わった、原三溪（本名・富太郎、1868～1939）の自筆書画をご紹介します。

本作品は、名勝地である琵琶湖・竹生島の風景を描いています。中央上部に月が描かれているのですが、これは『平家物語』に登場する平経正の逸話（*）に基づく画題でしょうか。峻険な岸壁の上に描かれている2棟の建物は、宝厳寺と都久夫須麻神社と考えられます。

賛の漢詩は、三溪の和歌・漢詩集である『三溪集』（昭和26年〔1951〕発行）にも、「竹生島」と題して掲載されています（一部語句違い）。落款に押されている印は「原後素」と「三溪」の2種類ですが、「後素」は「三溪」より早い時期から使用していた別号で、青木富太郎と名乗っていた若い時期にも使用していました。「三溪」と号し始めるのは明治37年（1904）頃です。

また、当館所蔵の「金華山と鵜飼図」（右の写真、昭和元年ごろ）とは山上の城と松の描き方が似通っていますが、「金華山と鵜飼図」の方に技術的な上達を感じられます。三溪の自筆絵画の特徴と変化を考えるうえで興味深い資料と言えるでしょう。

（*）木曾義仲追討に向かう途中、竹生島で祈願していると月がのぼり、琵琶の秘曲を演奏すると竹生島大明神の化身である白竜が現れた。



竹生島図



金華山と鵜飼図

利用の御案内

■ **開館時間** 午前9時～午後5時
（歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで）

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始（12月28日～1月3日）
（月曜日が祝日の場合はその翌日）

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

■ **観覧料** ◎歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館（団体は20人以上）

高校生以上……310円（団体250円）

小中学生……150円（団体90円）

両館共通で観覧される場合

高校生以上……520円（団体410円）

小中学生……260円（団体150円）

※特別展は、その都度料金を定めます。

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。

①岐阜市在住の70歳以上の方（特別展を除く）

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介護者1人

③家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族（高校生以上）の方（特別展を除く）

⑤岐阜市内の小中学生

◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

■ **交通案内** 《歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館》
JR 岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行に乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。

岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

お車でおこしの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。

詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



《原三溪記念室》

岐阜バス茜部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行に乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分

岐阜バス茜部三田洞線 もえぎの里及び高桑行に乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ

博物館だより No.110 2022.2

編集・発行 岐阜市歴史博物館

（分館）加藤栄三・東一記念美術館

（分室）原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(265)0010

☎058(264)6410

☎058(270)1080